

# ポスト・ヒップホップ世代における黒人の地下性

——古い問い，新しいアプローチ

(The Concept of the Black Underground in the Post-Hiphop Generation:  
The Old Question in New Approaches)

阿津坂祐貴 (Yuki ATSUSAKA)

## Abstract

The purpose of this paper is to examine the concept of the “Black underground” offered by Hiphop scholar James Braxton Peterson. First, this paper provides an overview of the concept. Second, it examines the uniqueness of Peterson’s argument emphasizing his conceptualization of the underground. Third, it discusses how the concept of Black underground should be appreciated in the current state of Hiphop studies. Showing the decreasing general interests in Hiphop, I argue that it is no longer appropriate to unconditionally assume that “Hiphop matters”; rather we have to carefully examine to whom Hiphop matters and why so in the post-Hiphop generation. I also emphasize the importance of the growing literature of Hiphop studies in various disciplines, especially in political science and pedagogy, concluding that the concept of the Black underground can be an effective tool to bridge the conventional Hiphop cultural studies and the recent studies on Hiphop.

**Keywords :** African American Culture, Hiphop Studies, Black Politics, Hiphop Pedagogy

## 1. はじめに

2014年12月13日，連続講演会「流体としてのことば，文化，地域」の第5回として，ジェームズ・ブラクストン・ピーターソン氏による一般公開講演会「アンダーグラウンドの底力——ヒップホップとアフリカ系アメリカ人文化」が開催された。ピーターソン氏は，リーハイ大学英語学部准教授であり，現在，同学部のアフリカーナ・スタディーズ学科長を務めている。専門は黒人文学・文化であり，特にヒップホップ研究の分野で著名な研究者である。また評論家としても積極的に活動しており，2014年のBlack Lives Matter運動が注目された際には，「専門家」として多くの発言を行っている<sup>1)</sup>。

講演当日は，まずヒップホップ研究団体であるSHIPS (Seminar for Hiphop Studies) によるパフォーマンス／レクチャー「体感型ヒップホップ入門」があり，ヒップホップについての解説が音楽，ダンス，映像などを交えて行われた。その後，ピーターソン氏により，新著『ヒップホップ・アンダーグラウンドとアフリカ系アメリカ人文化——表層の下で』（未邦訳，原題

*The Hip-Hop Underground and African American Culture: Beneath the Surface*, 2014) の内容をもとに、アメリカ合衆国における黒人の歴史的体験、文学、ヒップホップ文化に通底する「黒人の地下性」(the Black underground) についての講演が行われた。質疑応答では、ヒップホップ文化に関するものを中心に多くの質問があり、講演終了後にも、ピーターソン氏に質問しようとする学生の長い列がみられた。参加者は180人を越え、前座のパフォーマンス、講演内容、質疑応答を含め、総じて好評となった。

本講演の特徴は、次の二点である。第一に、本講演はヒップホップ研究者によるヒップホップ文化についての最新の研究報告であった。いいかえれば、本講演はアメリカ文学や黒人史の研究者が行うヒップホップ「解説」ではなく、専門家によるオリジナルな議論を紹介するものであった。印象論ではあるが、日本ではヒップホップ文化に対する一般的な関心に比べ、その学術的な関心は極めて低い。こうした中、ヒップホップについての学術的な報告を含む本講演は、多くの一般的、学術的関心を集めるものであったように思われる。第二に、DJ、ラップ、ストリートダンスのパフォーマンスを交えた前座の解説により、参加者が実際にヒップホップ文化とはどのような芸術形式、世界観、言語表現を含むものなのかを体感することができたという点が挙げられる。近年、ヒップホップ文化は、教育と娯楽を交えたエデュテインメント (edutainment) として注目を浴びているが、本講演はヒップホップのそうした側面を体験する機会になったともいえる。

しかしながら、本講演の特徴は、こうした企画自体の目新しさに限られるものではない。むしろ、その印象的な「表層の下」にこそ本講演のさらなる意義と特徴があるのではないだろうか。本稿では、ピーターソン氏の議論が、従来のヒップホップ研究に対してどのような問題提起を行い、貢献をしようと試みているのかを検討することで、本講演の意義について考察する。以下ではまず、講演の内容についての要約を行い、次にピーターソン氏の議論の特徴について検討する。そして最後に、ヒップホップ研究の現状と課題を明らかにする中で、本講演の内容がどのような意義と限界を持つのかについて論じていく。

## 2. 講演内容の要約

ピーターソン氏の命題は、アフリカ系アメリカ人の歴史と文化には、概念としての「黒人の地下性」なるものが断続的に現われ、それがそれぞれの時代ごとに異なる含意を持って、黒人文化を特徴づけてきたというものであった<sup>2)</sup>。この用語についての明確な定義は著作では見当たらなかったものの、講演の内容によれば、黒人文化における「地下性」とは、おおよそ次の2つのことを指し示すものであった<sup>3)</sup>。

第一に、地下性とは、アフリカ系アメリカ人の歴史と文化が主流の WASP (白人アングロサクソン・プロテスタント系) 中心的なアメリカ社会の「表層の下」に位置づけられてきたことに起因している。約言すれば、地下性とは、アフリカ系アメリカ人が自らの歴史と文化へのつながり (ルーツ) を認識し、それをたえず文化生産の中で反復、再生産、継承していく営みである。そしてこの作業において「重大な記憶」として繰り返し語られるのが、中間航路、奴隷制、リンチ、人種的隔離などの黒人の集合的な経験である。

第二に、地下性とは、アフリカ系アメリカ人の生活や文化生産の中に存在してきたひとつの表現手法を意味している。黒人の文化、文学、政治運動における言語的、非言語的表現の中では、しばしば（主に白人に向けられた）「表面上の意味」と（主に黒人に向けられた）「実際の意図」とが巧みに組み合わせられ、これが白人至上主義的なシステムの中で生き延びる黒人の抵抗の手段の一部として機能してきた。いいかえれば、地下性とは、アフリカ系アメリカ人が、巧みな比喩、黒人英語（African American Vernacular English: AAVE）、だまし絵や踊りなどを通じて、主流社会に対する抵抗の意図を「表層の下に」隠しながら表現することである。

つまり、黒人文化における地下性とは、黒人が自身の歴史と文化とのつながりを継承し、そこから得られた人種意識や抵抗の意図を、黒人のみに分かるようにして、日々の生活や文化生産の中で表現することであった。ピーターソン氏によれば、地下性の概念は、アフリカ系アメリカ人が人種差別的なアメリカ社会で生存していく中で発展し、奴隷制廃止運動、黒人芸術運動、黒人文学、そしてヒップホップなどの芸術・政治運動、視覚文化、美術的な技法や文学における言葉の綾の中に繰り返し登場してきたのである。

本講演では、ヒップホップ文化、黒人の歴史的体験、黒人文学という3つの異なる分野が取り上げられ、各分野において「地下性」という概念が繰り返し現れてきたことが指摘された。特に、各分野での地下性の代表的な担い手として、ヒップホップ文化におけるDJクルー・ハーク、ロック・ステディ・クルー、KRSワン、ラキーム、TAKI 183、プロジェクト・ブroud、黒人史における逃亡奴隷のための地下鉄道、黒人芸術運動、黒人文学におけるフレデリック・ダグラス、サットン・E・グリッグス、リチャード・ライト、ラルフ・エリソン、アミリ・バラカなどがそれぞれ紹介された。

こうした中、ヒップホップ研究者としてのピーターソン氏の最大の主張は、（しばしば黒人文化とは切り離された大衆文化として論じられる）ヒップホップ文化が、まさに「地下性」の概念によって、黒人文化の伝統に位置づけられるというものであった。これまで通俗的に、ヒップホップ文化における「地下性」とは、商業化の度合に関するものだと語られてきたが（たとえば、大企業から配信されないものこそが「アングラ」な作品であるなど）、ピーターソン氏はこれに対し、「社会正義」（白人至上主義に対する抵抗）という主題の有無を「地下性」の条件として提案している。このことから、現在のラップ・アーティストの中には、商業的な成功を視野に入れつつも、黒人文化の地下性を継承しているものが多数存在している、というのがピーターソン氏の主張であった。

こうした地下性をもっとも巧みに体現するものとしてピーターソン氏が紹介するのが、商業的なヒップホップ・アーティストとして評価されるビッグ・クリット（Big K.R.I.T.）による「祈る男（Praying Man）」という作品である。この曲においてクリットは、黒人の重大な記憶についての3つの物語を、そのことを明示的に示すことなく展開している。そのため同曲は、黒人史に精通している者のみが、3つの物語がそれぞれ、リンチを受け木に吊るされた黒人、奴隷貿易船から飛び降りた黒人、リンチから逃亡する黒人の視点から語られるものであると理解できる作品となっている。これらの物語は、アメリカ史における社会的不正義（人種的抑圧）に対し、自殺や逃亡という形でこれに抗う黒人の姿を描いている。さらに同曲は、ブルース・アーティストであるB・B・キングを客演にむかえ、黒人のルーツを音楽的にも反復し、ヒップホップの

楽曲として作り直すものであった。

### 3. 黒人の地下性とヒップホップ

ピーターソン氏の議論は、従来のヒップホップ研究に対し、どのような問題提起を行い、貢献をなしうるものなのだろうか。本節では、地下性論の特徴を明らかにすることで、ヒップホップ研究におけるピーターソン氏の議論の意義を検討する。

#### 3.1 黒人文化としてのヒップホップ

ヒップホップとは一体どのような文化なのか。この根本的な問いに対して、先行研究では、ヒップホップのポスト産業社会・ポストモダンの (Potter, 1995; Rose, 1994), 若者的 (Clay, 2003; Kelly, 1997; Kitwana, 2002), 共同体的 (Smitherman, 1997; Sullivan, 1997), 空間・場所的 (Forman, 2002), 活動主義的 (Clay, 2012; Bynoe, 2004; Watkins, 2005), 商業的 (Negus, 2004; Quinn, 2005; Smith, 2012), グローバル (Condry, 2006; Mitchell, 2002), 芸術・言語文化的 (Alim, 2006; Morgan, 2009; Perry, 2004), 文学的 (Bradley, 2009; Richardson, 2006), 政治的 (Collins, 2006; Pough, 2004; Rose, 2008) な側面が指摘されてきた。

こうした従来の研究に対して、ピーターソン氏の主張は、ヒップホップとは第一義的に「アフリカ系アメリカ人的」な文化であるということである (Peterson, 2014: 11, 17)。ややトートロジーのようだが、ピーターソン氏によれば、ヒップホップとは、黒人の歴史や文化とのつながりを、密やかに継承し表現することで、他の時代や空間で発展したアフリカ系アメリカ人文化と固く結びついている。このため、ヒップホップはまず黒人文化として理解されるべきであり、大衆文化としての側面を強調する先行研究はこの重要な点を見過しているのではないかとというのが、地下性論の問題提起であろう。

ただし、これまでもヒップホップとアフリカ系アメリカ人の経験の連続性に焦点を当てる研究がなかったわけではない (Aldrige, 2005; Decker, 1993; Gladney, 1995; Henderson, 1996; Iton, 2008; Perry, 2004)。しかし、そのほとんどは黒人民族主義や芸術様式に焦点を当てたものや、記述的な研究にとどまるものであり、ヒップホップとアフリカ系アメリカ人文化を包括的、また理論的に説明するものではなかった。こうした中、ピーターソン氏の議論の最大の特徴は、「地下性の概念化」を通じて、ヒップホップだけでなくアフリカ系アメリカ人文化全体を理論的に説明しようと試みていることにある<sup>4)</sup>。

#### 3.2 概念としての黒人の地下性

ピーターソン氏によれば、「黒人の地下性」とは、主流社会からは、または日常的には見えぬとも、アフリカ系アメリカ人文化を関係づけているルーツ (根) のようなものである。ここでいうルーツとは、「文字通り地下にもぐっている、また比喩的には象徴的な、個人の彼／彼女の歴史と文化とのつながり」を示している (Peterson, 2014: 2)。ピーターソン氏の議論の特徴は、この黒人の地下性という「概念」を用いて、ヒップホップおよびアフリカ系アメリカ人文化を説明しようとしている点にある。もう一つの特徴は、この「地下性」(アンダーグラウンド) と

いう用語が、ヒップホップ文化において一般的によく用いられるものであり、ヒップホップ文化そのものを示唆するような用語であるということである。

ヒップホップにおける地下性については、すでにこの分野の研究者によって、断片的にはあるが議論がなされてきた（Harrison, 2009; Morgan, 2009; Perry, 2004; Rose, 2008）。これらの議論では、「アンダーグラウンドなヒップホップ」とは、（通俗的な理解と同様に）ある特定のパフォーマンス様式や地理的空間、または市場原理との関係によって定義されてきた。こうした知見を踏まえながらも、ピーターソン氏は、地下的なヒップホップとは、「アフリカ系アメリカ人の歴史的経験のある特定のパターンについての言語学的内容と文化的意識」を含むものとして理解されるべきだと主張する（Peterson, 2014: 65）<sup>5)</sup>。そして、この「地下性」概念の再構成（reformulation）によって、ピーターソン氏は、ヒップホップをアフリカ系アメリカ人研究の領域に位置づけようと試みている（Bertholf, 2015: 133）。

ピーターソン氏の最大の功績は、ヒップホップの単なる記述に留まるのではなく、ヒップホップから生まれた地下性の概念を、黒人研究全般に適用できる概念として定式化しようと試みていることにある。この点で、ピーターソン氏の議論の新しさは、文学研究や文芸批評の分野で開発された理論を用いてヒップホップを説明するのではなく、ヒップホップの要素の中から、アフリカ系アメリカ人の歴史と文化を説明するのに有益な概念枠組みを提供していることにあると考えられる。

#### 4. 古い問い、新しいアプローチ：ヒップホップは重要なのか？

最後に本節では、ピーターソン氏の議論が、この20年のヒップホップ研究史において、どのような位置づけにあるのかを検討したい。しかしながら、ヒップホップ文化を対象とする研究については、これまでに膨大な数の論文と著作があり、これらをすべて網羅することは筆者の能力を超えている。そのためここでは、ヒップホップ文化に対する関心と研究の分野的な多様化という二点からヒップホップ研究の「大枠」を検討し、その中で本講演がどのような意味を持つのかについて考察したい<sup>6)</sup>。

##### 4.1 ヒップホップに対する関心の低下？

すべての学術研究がそうであるように、ヒップホップについての先行研究が認めてきたのは、「ヒップホップは重要である（Hip Hop Matters）」という前提であった（Rose, 2008; Watkins, 2005）。しかしながら、果たしてこの前提は今でもなお妥当なものなのかという問いは検討に値する。

図1は「ヒップホップに対する一般的な関心の推移」を示している。ここでは、一般的な関心の尺度として、『ニューヨーク・タイムズ』紙のデータベースにおける“Hip Hop”の検索結果数を用いている。図1によれば、ヒップホップに対する一般的な関心は、1990年代から2000年代前半にかけて急激に高まり、2004年付近を境にして、現在は低下傾向にあることがわかる。

また記事のみの結果をみると、2000年代以降に短期的な変動が繰り返し見られるが、2004年、2008年、2012年には、前年度に比べてヒップホップへの関心が高まっている。大統領選挙実施

年には人種についての議論が活発になり、これによりヒップホップ関係者の政治的言動が顕著になり、その結果、ヒップホップに対する関心が高まるのではないかと推論できるが、このデータからは確実なことがいえるわけではない。いずれにせよ、一般的な関心でみたヒップホップの重要性は、現在は低下傾向にあるといえそうである。

では、これに対して、ヒップホップに対する「学術的」な関心はどうか。図2は、Google Scholar における“Hip Hop”の検索結果数の推移を示している<sup>7)</sup>。これによれば、ヒップホップについて言及している学術論文・著作の数は、2000年代から2010年代前半にかけて急増し、2013年を境に低下している。特に、2014年の10,500件から2015年の8,310件にかけて急減しており、その差のいくらかは発表された論文がオンラインに反映されるまでの時間のラグによるものだと考えたとしても、大きく低下をみせている。

ここで、ヒップホップに対する一般的関心と学術的関心の間に、約10年の時間のラグがあると考え、図1と図2でみられる推移はある程度一致しているようにみられる<sup>8)</sup>。つまり、図1が2004年付近を頂点にゆるやかな山型の推移を描いているのに対し、図2は2013年を頂点に同じような推移を示している。もし、 $t$ 年におけるヒップホップに対する学術的関心が、 $t-10$ 年における一般的関心を反映しているとすれば、今後の学術的関心は徐々に低下していくのではないかと推測されるが、断定はできない。

しかしながら、こうした傾向は、Asante (2008) の「ポスト・ヒップホップ世代」の議論ときわめて親和的である。ヒップホップ世代とは、公民権運動とブラック・パワー運動の直後である1965年から1984年の間に生まれ、幼少期から青年期にかけてヒップホップ文化に触れて育った世代を指す (Kitwana, 2002)。これに対し、Asanteによれば、現在われわれは、「ポスト・

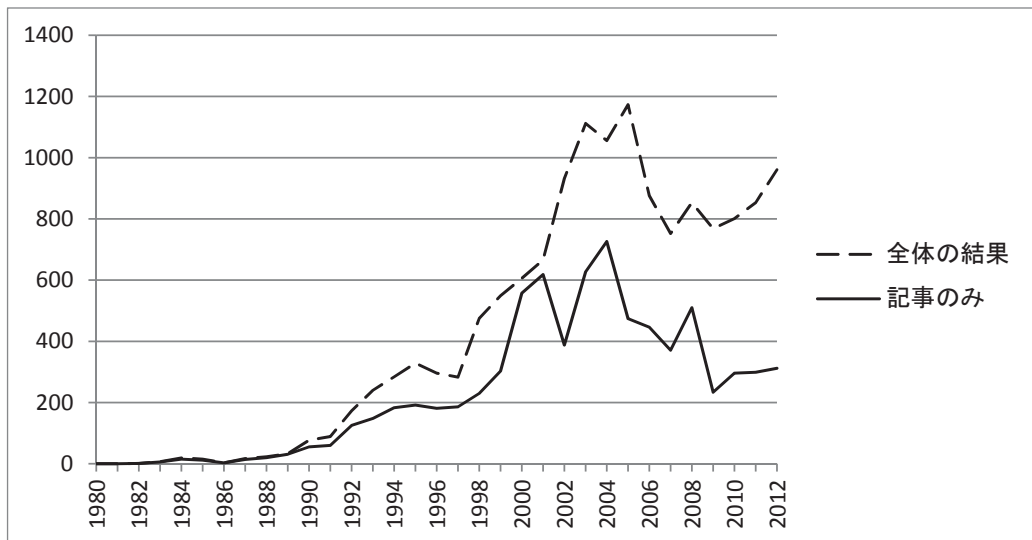


図1. ヒップホップに対する一般的な関心の推移

注：単位は件数。グラフは『ニューヨーク・タイムズ』紙データベースにおける“Hip Hop”の検索結果（2015年12月14日検索。全体の結果は、記事に加えて、批評、その他、目次などの項目を含む）出典：ProQuest Historical Newspapers: *The New York Times* (<http://search.proquest.com/hnpnewyorktimes/>)

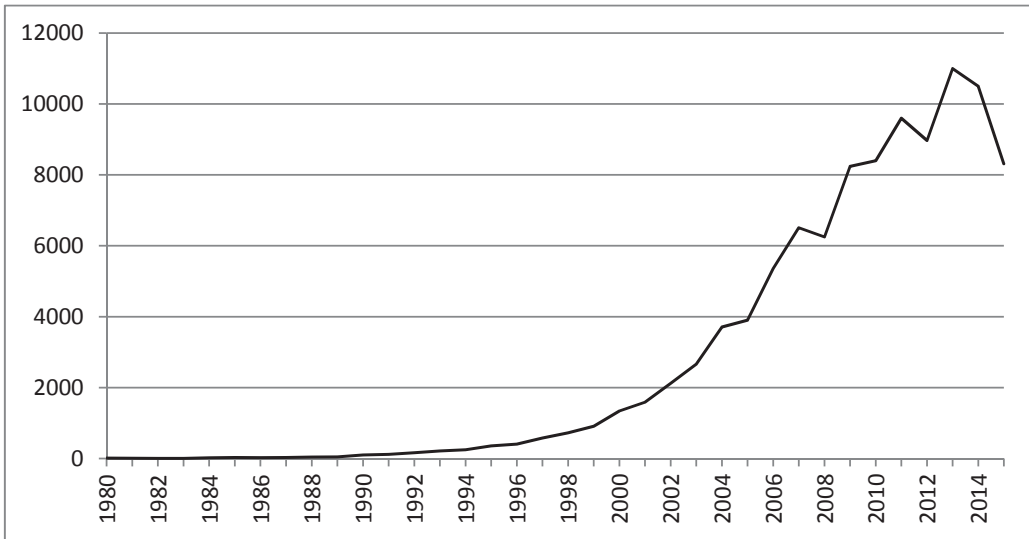


図2. ヒップホップに対する学術的な関心の推移

注：単位は件数。グラフはGoogle Scholarにおける“Hip Hop”の検索結果（2016年1月3日検索：「特許を含める」「引用部分を含める」は除外して検索）。出典：Google Scholar (<https://scholar.google.co.jp>)

「ヒップホップ世代」という「新しい時代への大きな過渡期」に生きている。この新しい世代は、大企業によって独占され、市場主義によって「汚染」されたヒップホップ文化の外部にある空間を強調し、これまでヒップホップが重要視してこなかった社会運動（女性の運動、反戦運動、ゲイの権利、反グローバリゼーション）をも取り込んでいくとされる（Asante, 2008: 1-12）。この議論が学術的な分析に基づくわけではなく、むしろ活動家としての著者の希望的観測のようにみえなくもない点には留意が必要なもの、2000年代半ばを境にヒップホップが大きな転換点を迎えているという指摘は重要だと思われる。

先にみたように、現在少なくとも大手全米報道紙において、ヒップホップに対する一般的関心はすでに低下傾向にあり、それに伴ってか、学術的関心も低下しつつあるようにみえる。このため、全体的にみていえば、現在もはや「ヒップホップは重要である」という前提は、少なくとも以前のように無条件に受け入れられるものではない。

だとすれば、ここに興味深いパズルが生じる。つまり、なぜ、一般的な関心が低下しているのにもかかわらず、Asanteのように、ヒップホップが以前にも増して重要であると考えた人々がいるのだろうか。いいかえれば、なぜ、一般的ではない関心は、一般的なそれと同様に低下してこなかったのか。いまだにヒップホップ文化を支持し、「ヒップホップは重要である」と考えているのは「どのような」人々なのだろうか<sup>9)</sup>。もし、一般的な関心が低下する中、一部の「専門的」な関心が高まるとするならば、それはポスト・ヒップホップ世代論が示唆するように、メディア産業で生み出されるヒップホップの缶詰製品（canned product）（KRS-One, 2003: 192）やそれをめぐる論争に対してではなく、その外部にあるものに対してではないだろうか。だとすれば、今後のヒップホップ研究は、従来の文化研究という枠組みを越えて、より広い学問分野の方法論、問題意識に依拠するものでなければならぬだろう。

#### 4.2 ヒップホップ研究の分野的多様化

これまでのヒップホップ研究史を考える上で重要なもうひとつの要素として、学問分野の多様化が挙げられる。ヒップホップ研究の発展は、Stuart Hallらイギリス左派系論者の知的潮流をくむカルチュラル・スタディーズや、歴史家 Robin D. G. Kelley によって提案された、日常的・文化的行為の政治的意味を問う文化史のアプローチ、またアメリカ合衆国の価値規範を、文化生産やそれをめぐる言説の批判的読解を通じて再考することを目的とするアメリカン・スタディーズなどの人文学における研究分野の発展と軌を一にしている<sup>10)</sup>。

ヒップホップ文化はこれらのアプローチに対して、絶好の「実験場」を提供し、またヒップホップ文化それ自体もこれらの分野が期待するような「ポリティカル」な文化へと発展していった。そのため、これまでヒップホップ研究といえば、限られた意味での文化研究や評論だという認識が一般的であったように思われる(川村, 2012)。

しかしながら、近年、文化研究以外の分野においてもヒップホップの研究が進んでおり、このことは特筆に値する。一般的に、それぞれの学問分野には固有の問題意識があり、その視点を踏まえて特定の対象が研究され、そのために最適な方法論が採用される。このため、異なる学問分野におけるヒップホップの研究は、従来型のヒップホップ文化研究に対して、新たな視点とアプローチを提供しうるだろう。

たとえば、政治学の分野においては、黒人政治を専門とする研究者が、ヒップホップへの関わりが人々の政治的態度や政治行動にどのように影響を与えているのかを検証してきた(Bonnette, 2015; Dawson, 1999, 2001; Cohen, 2010; Harris-Lacewell, 2004; Spence, 2011)。Dawsonは、1993-94年の全米の黒人に対する調査から、ラップを良いものだと考えている黒人はそうでない黒人よりも、黒人民族主義を支持する傾向にあるが、反対に、黒人民族主義を支持していることはラップを肯定的に評価することにはつながらないことを明らかにしている(2001: 126-129)。

また、Cohenは2005年の全米の若者に対する調査から、ラップ音楽とビデオに触れることが多い黒人の若者は、そうでない黒人の若者に比べて、政府官僚に対してネガティブな感情を持っていること、アメリカでは成功のための機会が平等に与えられていないと感じていることなどを報告している(2010: 134-140)。さらに、Spenceは、2003年のセントルイスにおける白人と黒人の学生に対する調査から、ラップをお気に入りの音楽と答えた黒人学生は、他の音楽形態をあげた黒人学生よりも、移民の流入、またテロ対策としての警察による私信へのアクセスなどに対して消極的な態度を持つということを見出している(2011: 71-79)。

このように、政治学におけるヒップホップ研究は、ヒップホップについて一般的に語られる諸説(たとえば、ヒップホップの影響など)を客観的なデータと科学的手法を用いて明らかにすることで、これまでの研究に新たな解釈の可能性を与えることが期待される<sup>11)</sup>。また、従来の研究がヒップホップにおける政治性に焦点を当ててきたのに対して、これらの研究は「政治システムにおけるヒップホップの役割」を検証しようと試みている<sup>12)</sup>。さらに、ヒップホップは、心理学(Stephens and Few, 2007)や宗教学(Miller, Pin and Freeman, 2015)などの分野においても研究が試みられている。

こうした中、近年発展が目覚ましいのが、教育学におけるヒップホップの研究である(Adjapong



and Emdin, 2015; Akom, 2009; Emdin, 2010; Hill, 2009; Hill and Petchauer, 2012; Seidel, 2011; Stovall, 2006)。「ヒップホップ教育学 (Hip Hop Pedagogy)」, または「ヒップホップをベースにした教育 (Hip Hop Based Education: HHBE)」と呼ばれるこの分野では, ヒップホップ文化で用いられる芸術様式や考え方などが, 公立学校における中等教育や課外教育において, どのような意義を持ち, 応用できるのかが主な研究対象とされてきた<sup>13)</sup>。

実際に, 一部の教育機関や課外教育においてヒップホップ文化の諸要素が採用されることに伴い, ヒップホップ教育学に対する学術的な関心は, 年々増加している。図2と同様に Google Scholar での検索結果数をみると, 2000年代前半では11本, 2000年代後半では71本の論文・著作が“Hip Hop Pedagogy”に言及していたのに対して, 2010年以降ではすでに391本の論文がこのテーマに触れている(2016年1月3日検索: 引用は含まない)。

たとえば, Adjapong and Emdin (2015) は, 共に教えること (co-teaching) とコール・アンド・レスポンス (call-and-response) というヒップホップの文化規範を授業に取り入れることで, 都市部の公立学校の6年次学生が, 科学的な内容をよりよく習得することを発見している。そして, 今後の課題として, ①異なる科目の授業におけるヒップホップ教育学の効果についての比較研究, ②ヒップホップの他の要素を用いたアプローチの検証, ③学生に対するヒップホップ教育学の実践の影響についての縦断的研究が必要になることを指摘している。

このように近年, ヒップホップは, 文化研究以外の学問分野においても積極的に研究がなされている。ここで取り上げた政治学や教育学においても, 今後はヒップホップについてのより「体系的」な研究が進んでいくことが期待される。だとすれば, そこで課題となるのはこれらの新しいアプローチと従来型のヒップホップ文化研究との統合であろう。

### 4.3 地下性論の貢献と課題

本節ではこれまで, ヒップホップ研究の現状と課題について, 関心の低下と学術分野の多様化という二つの側面から整理を行ってきた。最後に, これらの問題に直面するヒップホップ研究において, ピーターソン氏の議論がどのような特徴と限界を持つのかを明らかにし, 本講演の意義について改めて検討していきたい。

第一に, ピーターソン氏の著作は, ヒップホップ研究の嚆矢である Tricia Rose の *Black Noise* (1994) の登場からちょうど20年後に出版されている。このため, 前者の分析する作品や事例の射程は従来の研究に比べて広く, 1960年代から2010年代までの約50年間を通時的に扱っている。こうした中, ピーターソン氏の主張とは, ヒップホップとは何よりもまず「アフリカ系アメリカ人文化」であり, それはその「黒人の地下性」という概念によって根拠づけられるというものであった。

ただ, 黒人の地下性やヒップホップが「どのような」アフリカ系アメリカ人にとって「どれだけ」重要なのかという検討を経ずに, これらをあたかも黒人共同体全体のコンセンサスとして捉えることには留意が必要ではないだろうか。すでに指摘されているように, ヒップホップに対する世代間の認識のギャップは大きい (Boyd and Nuruddin, 2012)。また本節4.2でみたように, 現在, ヒップホップに対する一般的な関心は低下傾向にあり, ポスト・ヒップホップ世代論が示唆するように, ヒップホップ文化それ自体も大きな転換期の中にある。ここで問題に

なるのが、ヒップホップ文化とは誰にとってどれほど重要なのか、またその理由はなにか、という点である。いいかえれば、どのようなタイプの黒人にとってヒップホップは重要なのかを明らかにすることが今後のヒップホップ研究の課題として挙げられるのではないだろうか。

こうした中、ピーターソン氏のいう「アンダーグラウンド・ヒップホップ」、または地下性の概念が、どれほど黒人共同体の「主流」の主張を持ち合わせているのか、という点は検討に値する。果たして、黒人の地下性とは、他の社会的構造や政治的な見方による影響をコントロールしてもなお、大多数の黒人に支持されるものなのだろうか<sup>14)</sup>。あるいは、ピーターソン氏のいう地下性とは、一部のよりラディカルで民族主義的な黒人のみに受け入れられ、より一般的にはそれほど支持されるものではないのだろうか。それとも、問題は個人のイデオロギー的立場ではなく、「世代」にあるのだろうか。つまり、ヒップホップは、ポスト公民権期に育った「当時の若者」(ヒップホップ世代)によっては広く受け入れられたものの、すでに「現在の若者」(ポスト・ヒップホップ世代)の大多数にとっては、重要な意味をなさなくなっているのだろうか。そして、もし現在ヒップホップを支持する若者が黒人共同体の中でも「少数派」であるならば、なぜ彼女ら彼らは、同世代の指向に反して、ヒップホップの地下性を支持しているのだろうか。

ピーターソン氏の議論は、これらの重要な論点をあくまで直視することなく、こうした他の社会的亀裂の可能性を、人種(黒人の地下性)のベールで覆ってしまっているようにも感じられる。いいかえれば、ピーターソン氏の議論は、アフリカ系アメリカ人を一枚岩の共同体として想定しているように思われる。事実、彼の著作についての書評における批判の一つも、この点を指摘するものであった。評者のBertholfによれば、ピーターソン氏が地下性を概念化する際に提示する作品とは、そのほとんどすべてが黒人男性によるものであり、黒人女性としてはトニ・モリスンなどが申し訳程度に言及されただけであった(Bertholf, 2015: 133)。当事者の意図や事実を越えて、黒人の共通性や黒人の抵抗などを強調することは、ヒップホップや黒人文化がどう「ある」のかを議論する際には、控えなければならないだろう。しかしながら、こうした副次的な問いが生まれることこそがピーターソン氏の概念化の貢献に当たるものであり、これを積極的な批判と新しい研究につなげることが何よりも重要であると思われる。

第二に、ピーターソン氏の議論は、ヒップホップ文化の中でも、ラップ音楽の楽曲と歌詞の内容に注目する点において、ある種王道のヒップホップ文化研究であった。しかし、方法論的にみてピーターソン氏の議論は、いわゆる文化空間の政治性を明らかにすることを目的とするタイプの文化研究とはまた異なる理論枠組みやアプローチに依拠している。具体的には、文学研究、エスノグラフィー、ジャーナリズム、言語学、アフリカーナ研究、物語学を組み合わせることで、独自のアプローチを試みている(Peterson, 2014: 2)。そして、ピーターソン氏の議論の特徴とは、「ヒップホップをめぐる問題」について論じるのではなく、ヒップホップそのものについて一貫した説明を行っている点であった。ただし、こうした学際的な方法論が、どれほど有効に機能しているのかについては、今後のさらなる批判を待たなければならないだろう。

他方で、黒人の地下性がアフリカ系アメリカ人文化に通底しているという議論は、他の学問分野におけるヒップホップ研究に対して幅広いインプリケーションを持ちうる。たとえば、黒人の地下性の概念は、ラップ音楽の消費と黒人民族主義への支持の間の関係を説明するにあたって、有効な理論的知見を与えてくれる。政治学による分析では、両者の間に何らかの関係があ

ることは分かるものの、それらがなぜ、どのように関係しあっているのかを明らかにするためには、より広い黒人政治や黒人文化の知見を必要とする。これに対して、ピーターソン氏の議論は、アフリカ系アメリカ人文化は地下性という概念を共有することで、黒人の民族主義的な意識を高める効果を持っており、そのためラップ音楽の消費が黒人民族主義への支持を高めるのである、といった説明を提供することができるかもしれない。

また、アフリカ系アメリカ人文化が地下性を共有しているとすれば、ラップ音楽だけでなく他の黒人文化・芸術に触れることでも、ラップ音楽のときと同様に、黒人民族主義への支持が高まるはずだという仮説を導くことにもつながる。同様に、ヒップホップを授業に取り入れることは、黒人学生や非黒人学生の歴史認識や社会化にどのような影響を与えるのか、という関連した問いをヒップホップ教育学に投げかけることが可能になるかもしれない。また、ピーターソン氏の議論は、従来型のヒップホップ文化研究ともきわめて親和的であり、ヒップホップの文化実践がヒップホップにおける諸概念（ここでは、地下性）とどのように関連しているかについての研究に発展していくことも考えられる。さらにいえば、ピーターソン氏の議論は、従来型のヒップホップ文化研究と他の分野における新しいヒップホップ研究との融合に、妥当な概念的枠組みを提供することが期待される。

このように幅広いインプリケーションを持つことは、ピーターソン氏の研究の大きな貢献の一つであろう。今後の課題としては、黒人の地下性概念を精緻化し、異なる分野の研究者によるヒップホップの共同研究を促進していくことが挙げられる。そして、ヒップホップ研究を一般的関心に伴う単なる「流行り」に留めないためにも、一層の体系的な研究が期待される。ピーターソン氏の講演は、そのための一つの足がかりを提供するものであったといえるのではないだろうか。

## 5. おわりに

本稿ではこれまで、ピーターソン氏の講演の特徴を幾つかの限られた論点にそって検討してきた。本講演は、ヒップホップ研究のオリジナルな研究報告であったこと、実際のパフォーマンスを含んだ解説があったことなどから、多くの新しさを持つ講演会であった。また講演の内容についても、ピーターソン氏の議論は、従来のヒップホップ研究に多くの問題提起を行うものであり、同分野の今後の発展に大きく貢献するものであった。ヒップホップは、黒人の地下性という概念を共有することで、アフリカ系アメリカ人文化として捉えることができるというピーターソン氏の議論は、ヒップホップの黒人性を改めて強調すると共に、ヒップホップの要素の中から、黒人文化全体を説明する概念を取り出すという点で非常にユニークなものであった。現在、ヒップホップは一般的な関心の低下やポスト・ヒップホップ世代論の登場が示すように、大きな転換点にあり、またヒップホップ研究も政治学や教育学などの知見を取り込むことで、分野的な多様化の最中にある。こうした中、本講演は、黒人共同体内の共通性と差異についての問いを引き出し、他の学問分野におけるヒップホップ研究と従来型のヒップホップ文化研究の融合に概念的な枠組みを提供するなど、多くのインプリケーションを持つものであった。本講演が、ヒップホップ研究のさらなる発展につながることを期待したい。

## Note

- 1) 主な論文としては、Peterson (2006, 2009, 2012) などがある。また、評論家としての活動としては、Black Lives Matter 運動とヒップホップの関係について論じた Henderson (2014) を参照。
- 2) 本稿では、講演の内容に合わせて、「黒人」と「アフリカ系アメリカ人」を互換的に用いる。また、議論を整理するにあたり、講演の内容に加えて、原著 (Peterson, 2014) を参照している。
- 3) 本講演では、原著の中でも特にヒップホップに関する部分が紹介された。それ以外の議論については、同書の書評である Bertholf (2015) を参照。
- 4) ただし、ピーターソン氏は、黒人の地下性について、理論 (theory) という用語を用いて説明していない。その代わりに多用されるのが、概念 (concept)、概念的 (conceptual)、概念化 (conceptualization) という用語である。
- 5) 詳しい定義や分析の手法については、Peterson (2014) の第4章を参照。ここでピーターソン氏は、黒人の地下性を定義するにあたり、Herman Gray の 文化的移動 (Cultural Moves)、Salamishah Tillet の 奴隷制という場 (Sites of Slavery)、Ray Jackendoff の概念的構造 (Conceptual Structures) という三つの分析概念に依拠している。
- 6) ヒップホップ研究の初期の発展については、Morgan (2009: 6-10) を参照。
- 7) Google Scholar は、Google の提供する学術文書検索サービス (<https://scholar.google.co.jp>) である。現在は、論文、著作、著者ごとの「被引用数」を同時にみることができ、誰のどの論文・著作が今もっともよく引用されているのかを知ることができる。なお、ヒップホップ研究の分野でもっともよく引用されている著作には次のようなものがある ([ ] 内は被引用数): Rose (1994) [2369], Chang (2005) [802], Kitwana (2002) [668], Potter (1995) [420], Forman (2002) [396], Perry (2004) [391], Mitchell (2002) [365] (2015年12月25日検索)。
- 8) ただし、図1と図2では、縦軸の数字が統一されておらず、両者の数の規模は全く異なることには留意が必要である。
- 9) ここでヒップホップに対する関心のバリエーションを説明する変数 (要因) として筆者が想定しているのは、年齢、性別、世代、人種、社会経済的地位、政治的立場、宗教的信条などである。
- 10) これらの研究分野については、和泉・趙 (2007) を参照。
- 11) たとえば、Spence (2011) の研究はヒップホップ界で長年「信じられてきた」通説を否定している点で興味深い。Spence は、ヒップホップの歌詞データベースである The Original Hip-Hop Lyrics Archive ([www.ohhla.com](http://www.ohhla.com)) から478の楽曲を無作為に抽出し、各曲に登場する概念や単語をコード化することで、これらを「描写的写実主義 (descriptive realist)」、「論争的写実主義 (argumentative realist)」、「非写実主義 (nonrealist)」に分類する。その結果、ゲットーの現実について言及している写実主義の楽曲は、標本の36%を占めており、その中でも、単にこうした都市生活を無批判に描き出す「描写的」な楽曲が52%、描写するだけでなく批判を交える「論争的」(政治的) な楽曲が24%であったことを報告している。ラップ音楽を擁護する論者は、写実主義のラップは単にゲットーの犯罪や貧困を描写するだけでなく、これに批判を加えることで政治的なメッセージを発していると主張してきたが、これに対し Spence の分析結果は、量的に見れば、後者のような楽曲は前者のような楽曲の半数にも満たないことを示している (2011: ch.1)。

また、Spence はラップ音楽のビデオに触れることが人々の政治的態度にどのような影響を与えるのかを検証するために、実験を行っている。実験では、63人の学生に対して、(記憶力と政治的意見を検証するための実験だと伝え)、描写的写実主義の代表的なアーティストである「50 Cent のビデオ」と、論争的写実主義の代表的なグループである「Public Enemy のビデオ」、そして「ビデオ無し」をそれぞれ無作為に割り当て (以下、50 処置群、PE 処置群、統制群とする)、ビデオを注意深く見てもらった後に (統制群には何もみせずに) 調査を行っている。その結果、PE 処置群は、50 処置群よりも、アルコール

ル・麻薬中毒者、廃屋、暴行や強盗に対してはより否定的な意見を表明していたが、麻薬の使用、性的暴行については統計的に有意な差は見られなかった。さらに、これらの項目ではPE処置群、50処置群は、どちらも統制群（何も見せないグループ）と比べてより肯定的な意見を表明しており（より正確には、麻薬の使用と性的暴行をより重要な問題として挙げておらず）、ラップ音楽のビデオに触れることは（50にせよPEにせよ）悪影響を及ぼし得ることが示唆されている（その他の項目については、表2.7.(91)を参照）(79-93)。

こうした結果は、ヒップホップのプラスの側面を信じる人々にとっては当然受け入れがたいものであろう。ただ、Spenceの実験は学生に限られたものであり、より政治的・社会化の進んだ青年層や中年層を対象に再度実験を行えば、異なる結果が得られる可能性は十分にあり得る。また前者の歌詞の分析も、2000年代半ばに行われたと考えられるが（正確な実施年は書かれていない）、ヒップホップ文化それ自体の時間的変化を考慮し、2016年現在に同様の調査を行えば異なる結果が得られるかもしれない。このような地道なデータの収集と分析なくして、ヒップホップを単に擁護または断罪することは、印象論にもとづく水掛け論にすぎなくなるということには留意すべきだろう。

- 12) 理論的には、これらの研究ではヒップホップを黒人公衆圏 (black public sphere) として捉えることが一般的である。黒人公衆圏 (黒人対抗公共 black counterpublic, 黒人平行公共 black parallel public と呼ばれる) とは、アメリカ主流社会の言説空間 (公共圏) に対して、アフリカ系アメリカ人が共有する (とされる) 議論のための空間を指す。黒人公衆圏の理論的な考察としては Dawson (2001: 23-42) を、このテーマについての論文集としては The Black Public Sphere Collective (1995) を参照。
- 13) ヒップホップ教育学のレビューとしては、Petchauer (2009) を参照。
- 14) 人種とその他の社会的亀裂との関係については、Dawson and Cohen (2002) を参照。

## Reference

- Adjapong, Edmund S., and Christopher Emdin. 2015. "Rethinking Pedagogy in Urban Spaces: Implementing Hip-Hop Pedagogy in the Urban Science Classroom." *Journal of Urban Learning, Teaching, and Research (JULTR)* Vol. 11: 66-77.
- Akom, A. A. 2009. "Critical Hip Hop Pedagogy as a Form of Liberatory Praxis." *Equity & Excellence in Education* Vol. 42 (1): 52-66.
- Aldridge, Derrick P. 2005. "From Civil Rights to Hip Hop: Toward a Nexus of Ideas" *The Journal of African American History* Vol.90 (3): 226-252.
- Alim, H. Samy. 2006. *Roc the Mic Right: The Language of Hip Hop Culture*. New York: Routledge.
- Asante, M. K. Jr. 2008. *It's Bigger than Hip Hop: The Rise of the Post-Hip-Hop Generation*. New York: Macmillan.
- Bertholf, Garry. 2015. "Book Review: James Braxton Peterson. *The Hip-Hop Underground and African American Culture: Beneath the Surface*. New York: Palgrave Macmillan, 2014. Pp. 204. \$95.00 (Cloth)" *Journal of Popular Music Studies* Vol. 27 (1): 132-135.
- Bonnette, Lakeyta. M. 2015. *Pulse of the People: Political Rap Music and Black Politics*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.
- Boyd, Todd and Yusuf Nuruddin. 2012. "Intergenerational Culture Wars: Civil Rights vs. Hip-Hop." in *That's the Joint!: The Hip-Hop Studies Reader* edited by Murray Forman and Mark Anthony Neal. New York: Routledge, 438-450.
- Bradley, Adam. 2009. *Book of Rhymes: The Poetics of Hip Hop*. New York: Basic Civitas Books.
- Bynoe, Yvonne. 2004. *Stand and Deliver: Political Activism, Leadership, and Hip Hop Culture*. New York: Soft Skull Press.

- Chang, Jeff. 2005. *Can't Stop Won't Stop: A History of the Hip-Hop Generation*. New York: St. Martin's Press.
- Collins, Patricia Hill. 2006. *From Black Power to Hip Hop: Racism, Nationalism, and Feminism*. Philadelphia: Temple University Press.
- Cohen, Cathy J. 2010. *Democracy Remixed: Black Youth and the Future of American Politics*. New York: Oxford University Press.
- Condry, Ian. 2006. *Hip-Hop Japan: Rap and the Paths of Cultural Globalization*. Durham, NC: Duke University Press.
- Clay, Andreana. 2003. "Keepin' it Real: Black Youth, Hip-Hop Culture, and Black Identity." *American Behavioral Scientist* Vol. 46 (10): 1346-1358.
- . 2012. *The Hip-Hop Generation Fights Back: Youth, Activism and Post-Civil Rights Politics*. New York: New York University Press.
- Dawson, Michael C. 1999. "Dis Beat Disrupts: Rap, Ideology, and Political Attitudes." in *The Cultural Territories of Race: Black and White Boundaries*. edited by Michele Lamont. Chicago: The University of Chicago Press, 318-42.
- . 2001. *Black Vision: The Roots of Contemporary African-American Political Ideologies*. Chicago: University of Chicago Press.
- Dawson, Michael C. and Cathy J Cohen. 2002. "Problems in the Study of the Politics of Race" in *Political Science: The State of the Discipline* edited by Ira Katznelson and Helen V. Milner. New York: Norton, 488-510.
- Decker, Jeffrey Louis. 1993. "The State of Rap: Time and Place in Hip Hop Nationalism." *Social Text* Vol.34: 53-84.
- Emdin, Christopher. 2010. *Urban Science Education for the Hip-Hop Generation*. Boston, MA: Sense Publishers.
- Forman, Murray. 2002. *The 'Hood Comes First: Race, Space, and Place in Rap and Hip-Hop*. Middletown, CT: Wesleyan University Press.
- Gladney, Marvin. J. 1995. "The Black Arts Movement and Hip-Hop." *African American Review* Vol.29 (2): 291-301.
- Harris-Lacewell, Melissa. 2004. *Barbershops, Bibles, and BET: Everyday Talk and Black Political Thought*. Princeton, N.J.: Princeton University Press.
- Harrison, Anthony Kwame. 2009. *The Hip Hop Underground: Integrity and Ethics of Racial Identification*. Philadelphia: Temple University Press.
- Henderson, Errol A. 1996. "Black Nationalism in Rap Music." *Journal of Black Studies* Vol. 26 (3): 308-339.
- Henderson, Nia-Malika. 2014. "How Ferguson and Eric Garner Show the Political Power of Hip-hop." *Washington Post*, December 13.
- Hill, Marc Lamont. 2009. *Beats, Rhymes, and Classroom Life: Hip-Hop Pedagogy and the Politics of Identity*. New York: Teachers College Press.
- Hill, Marc. Lamont and Emery Petchauer eds. 2012. *Schooling Hip-Hop: Expanding Hip-Hop Based Education across the Curriculum*. New York: Teachers College Press.
- Iton, Richard. 2008. *In Search of the Black Fantastic: Politics and Popular Culture in the Post-Civil Rights Era*. New York: Oxford University Press.
- 和泉真澄・趙無名編 . 2007. 『アメリカ研究の理論と実践——多民族社会における文化のポリティクス』世界思想社 .
- 川村亜樹 . 2012. 『ヒップホップの政治学——若者文化によるアメリカの再生』大学教育出版 .
- Kelley, Robin. D G. 1997. *Yo' Mama's Disfunktional!: Fighting the Culture Wars in Urban America*. Boston:

- Beacon Press.
- Kitwana, Bakari. 2002. *The Hip Hop Generation: Young Blacks and the Crisis in African American Culture*. New York: Basic Civitas Books.
- KRS-One. 2003. *Ruminations*. New York: Welcome Rain Publishers.
- Miller, Monica R., Anthony B Pinn and Bernard "Bun B" Freeman. eds. 2015. *Religion in Hip Hop: Mapping the New Terrain in the US*. New York: Bloomsbury Publishing.
- Mitchell, Tony. 2002. *Global Noise: Rap and Hip Hop Outside the USA*. Middletown, CT: Wesleyan University Press.
- Morgan, Marcyliena. 2009. *The Real Hip-hop: Battling for Knowledge, Power, and Respect in the LA Underground*. Durham, NC: Duke University Press.
- Negus, Keith. 2004. "The Business of Rap: Between the Street and the Executive Suite." in *That's the Joint!: The Hip-Hop Studies Reader* edited by Murray Forman and Mark Anthony Neal. New York: Routledge, 525-540.
- Perry, Imani. 2004. *Prophets of the Hood: Politics and Poetics in Hip Hop*. Durham, NC: Duke University Press.
- Peterson, James Braxton. 2006. "Dead Prezence': Money and Mortal Themes in Hip Hop Culture." *Callaloo* Vol. 29 (3): 895-909.
- . 2009. "Corner-boy masculinity: Intersections of inner-city manhood." in *The Wire: Urban Decay and American Television*. edited by Tiffany Potter and CW Marshall. New York: The Continuum International Publishing Group Inc, 107-121.
- . 2012. "The Revenge of Emmett Till: Impudent Aesthetics and the Swagger Narratives of Hip-Hop Culture." *African American Review* Vol.45 (4): 617-631.
- . 2014. *The Hip-Hop Underground and African American Culture: Beneath the Surface*. New York: Palgrave Macmillan.
- Petchauer, Emery. 2009. "Framing and Reviewing Hip-Hop Educational Research." *Review of Educational Research* Vol.79 (2): 946-978.
- Potter, Russel A. 1995. *Spectacular Vernaculars: Hip-Hop and the Politics of Postmodernism*. Albany, New York: State University of New York Press.
- Pough, Gwendolyn D. 2004. *Check It While I Wreck It: Black Womanhood, Hip-Hop Culture, and the Public Sphere*. New Hampshire: University Press of New England.
- Quinn, Eithne. 2005. *Nuthin' but a "G" Thang: the Culture and Commerce of Gangsta Rap*. New York: Columbia University Press.
- Richardson, Elaine. 2006. *Hiphop Literacies*. New York: Routledge.
- Rose, Tricia. 1994. *Black Noise: Rap Music and Black Culture in Contemporary America*. Hanover: University Press of New England.
- . 2008. *The Hip Hop Wars: What We Talk About When We Talk About Hip Hop – and Why It Matters*. New York: Basic Civitas Books.
- Seidel, Sam. 2011. *Hip Hop Genius: Remixing High School Education*. Lanham, ML: R&L Education.
- Smith, Christopher Holmes. 2012. "I Don't Like to Dream About Getting Paid': Representations of Social Mobility and the Emergence of the Hip-Hop Mogul." in *That's the Joint!: The Hip-Hop Studies Reader* 2nd ed, edited by Murray Forman and Mark Anthony Neal. New York: Routledge, 673-689.
- Smitherman, Geneva. 1997. "'The Chain Remain the Same': Communicative Practices in the Hip Hop Nation" *Journal of Black Studies* Vol.28 (1): 3-25.
- Spence, Lester K. 2011. *Stare in the Darkness: The Limits of Hip-hop and Black Politics*. Minneapolis: University of Minnesota Press.

- Stephens, Dionne. P. and April L. Few. 2007. "The Effects of Images of African American Women in Hip Hop on Early Adolescents' Attitudes toward Physical Attractiveness and Interpersonal Relationships." *Sex Roles* Vol. 56 (3-4): 251-264.
- Stovall, David. 2006. "We Can Relate Hip-Hop Culture, Critical Pedagogy, and the Secondary Classroom." *Urban Education* Vol. 41 (6): 585-602.
- Sullivan, Lisa Y. 1997. "Hip-Hop Nation: The Undeveloped Social Capital of Black Urban America." *National Civil Review* Vol.86 (3): 235-243.
- The Black Public Sphere Collective. 1995. *The Black Public Sphere: A Public Culture Book*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Watkins, S. Craig. 2005. *Hip Hop Matters: Politics, Pop Culture, and the Struggle for the Soul of a Movement*. Boston, MA: Beacon Press.